

# 東京外国語大学 夏期世界史セミナー —世界史の最前線—

東京外国語大学では、本学の世界各地域の歴史学担当スタッフによる最新の研究成果を公開するとともに、高校で世界史教育を担当する先生の方々との対話を通じて、世界史教育に新たな視座を示すことを目標に2日間のセミナーを実施します。この機会に日ごろの世界史教育での悩みなど一緒に考えていきましょう。皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2009年7月27日(月)～28日(火) 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 427

## TUFS OPEN ACADEMY

### プログラム

※今後の調整によって、多少、変更になる可能性もありますので、ご了承ください。

1 日 目	27日(月)	10:00～10:30	受付
		10:30～11:30	「東京外国語大学で地域史をどう捉えているか」(鈴木茂)
		11:30～11:50	質疑応答
		11:50～13:00	昼食・休憩
		13:00～14:00	「近世ヨーロッパ国制の再検討—スペイン帝国の構造を中心に」(立石博高)
		14:00～14:20	質疑応答
		14:30～15:30	「『東欧』史の描き方」(篠原琢)
		15:30～15:50	質疑応答
		16:00～17:00	「ジェンダーからみる南アジア近代史：宗教・社会改革、ナショナリズム、国民国家の表象」(栗屋利江)
		17:00～17:20	質疑応答
		17:20～18:30	1日目全体 意見交換
2 日 目	28日(火)	09:00～10:00	「アメリカ革命による共和制から民主制へ」(金井光太郎)
		10:00～10:20	質疑応答
		10:30～11:30	「『トルコ』を軸に世界史をみる」(新井政美)
		11:30～11:50	質疑応答
		11:50～13:00	昼食・休憩
		13:00～14:00	「中国開封の消えたユダヤ人」(佐藤公彦)
		14:00～14:20	質疑応答
		14:30～15:30	「『ペルシア』か『イラン』か？『ペルシア人』か『イラン人』か？—国民国家的歴史認識の『虚構』—」(八尾師誠)
		15:30～15:50	質疑応答
		15:50～17:00	2日目・全体 意見交換

# 参加条件・申込み方法等

日程 2009年7月27日(月)、28日(火)(2日間)

会場 東京外国語大学 府中キャンパス  
(東京都府中市朝日町 3-11-1)  
西武多摩川線「多磨」駅より  
徒歩5分、  
又は京王線「飛田給」よりバス

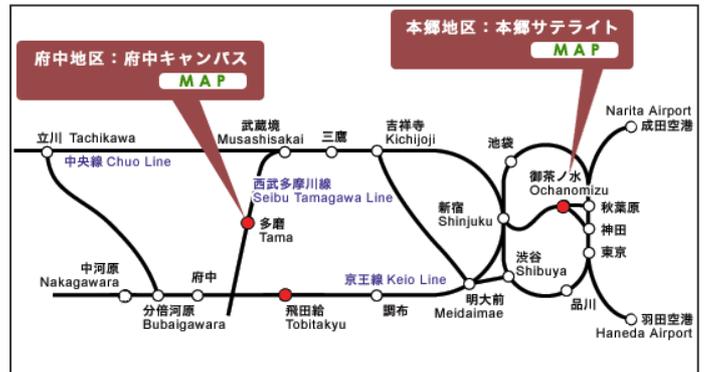
対象 高等学校、  
予備校の世界史担当教員

受付期間 2009年7月10日まで

受講料 6,000円  
入金方法は参加申込者に後日  
お知らせいたします。

応募方法  
下記のホームページアドレスに  
アクセスし、お申し込みください。  
ホームページアドレス：  
<http://www.tufs.ac.jp/common/open-academy/>

なお、宿泊が必要な方は、  
事前に宿泊先を確保した上で  
お申し込みください。



## [お申込み先]

東京外国語大学 企画広報課  
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1  
TEL:042-330-5150 FAX:042-330-5140  
<http://www.tufs.ac.jp/common/open-academy/>

## [お問い合わせ]

吉田ゆり子 (海外事情研究所所長)  
yoshida.yur@tufs.ac.jp

## [企画・運営]

東京外国語大学 海外事情研究所  
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

# プログラムの紹介 一日目

## 東京外国語大学で地域史をどう捉えているか

鈴木 茂

近年、高校生の「世界史離れ」「世界史嫌い」を指摘する声が高まっています。2006年には全国各地でいわゆる「世界未履修問題」が「発覚」し、高等学校における「世界史」教育の現状の一端が広く知られるようになったのは、記憶に新しいところです。本学は2006年度の入学試験（2006年2月実施、前期日程のみ）から「世界史」を必修化しました。本学の「世界史」は「日本を含む近現代の世界史」としたため、「日本史との関係」や「近現代の始まる時期」など、この出題範囲について、導入当初から多くの質問が寄せられて来ました。現行の高等学校やセンター試験での科目構成からすれば、こうした「技術的」な疑問はもっともなことですが、本学が「世界史」を入試科目として課すことにしたのは、入学後のカリキュラムへの接続という意味が込められています。そこで、過去4回の入学試験の経験を踏まえ、本学のカリキュラムとの関係で、「世界史」必修化のねらいをお話したいと思います。

## 近世ヨーロッパ国制の再検討— スペイン帝国の構造を中心に

立石 博高

高校世界史の教科書記述において「主権国家」という言葉は、ヨーロッパが中世世界から近代世界へと発展していく過程における国家のあり方のキーワードになっている。絶対王政の「絶対性」が疑われるようになっても、近世の諸国家は基本的には主権国家として形成され、やがて国民国家へと発展していったという歴史理解が続いているのである。しかし、中世から近世にかけての諸国家は、多様な地域・国が複合的かつ広域的に政治統合されているという状態が一般的であった。本報告では、「太陽の沈まぬ帝国」とされたスペイン王国を取り上げて、「複合王政」、「複合国家」という概念に基づいて近世ヨーロッパの国制を見直すことの必要性を提起したい。

## 「東欧史」の語り方

篠原 琢

世界史教科書のなかで、東欧関係の記述が十分ではなかったとしても、それは驚くべきことではない。むしろ、教科書からは東欧について相当量の知識を得ることができる。問題はその記述をたどったときに明らかになる東欧像であり、さらにそれを通して観察される世界史のイメージである。

世界史教科書全体が事件史を中心としているが、東欧の場合、それはとくに顕著である。支配、反乱、戦争とともに記述されるために、東欧は常に不安定な地域として認識される。事件相互の関係は必ずしも明らかではないが、暗黙のうちに、東欧の歴史を、小民族の大国の支配に対する抵抗の物語として語る、単純な構図が想定されている。もちろん、多くの場合、生徒たちは、そのような物語が読み取るよりは、断片的な事件と（しばしば覚えにくい）人名をただ覚えなければならない面倒な領域としてしか、東欧史を捉えないかもしれない。

東欧史について、教科書記述からいくつかの具体例を挙げながら、世界史のなかでの物語の構成について、考えてみたい。

## ジェンダーからみる南アジア近代史： 宗教・社会改革、ナショナリズム、国民国家の表象

粟屋 利江

イギリス支配期にあらたに様々な宗教・社会改革運動が展開する。その過程で焦点の一つになったのが「女性の地位」だった。幾つかの代表的な論争（サティ、寡婦の再婚と幼児婚など）は、同時に、あるべき「ヒンドゥー社会」のあり方そのものをめぐる論争であったともいえる。こうした論争を通じて創造されていったインド社会像はすぐれて「ヒンドゥー的」、かつ、上位カースト的な偏りを内在化していた。一方、インド・ナショナリズムは女性/女神を国民国家の表象としたという特色を有す。ジェンダーの視点からインドの脱植民地化の歴史を見たとき、今日問題となっている宗教対立（コミュニズム）、カースト対立、そしてジェンダー問題を理解する、また別の視座を提示できるであろう。

アメリカ革命による共和制から民主制へ

金井 光 太 朗

英領アメリカ植民地人は出身地イングランドの伝統文化・慣習を多く持ち込んだのであり、長い間基本的には本国イギリス文化に愛着を持っていた。タウンミーティングも民主主義というより和の社会、コンセンサスを維持するものであった。政治的にも、統治者と被治者とを峻別する君主制原理を信奉していた。世のため人のために公のことに心を砕くことができる賢明で余裕のある統治者は特別な少数者であり、それ以外の被治者は自己の財産、生活を維持するのに集中するのであった。当初、反英運動は、同意なき課税に対する被治者の伝統的な請願、抵抗から始まったにすぎなかった。しかし、課税法の一方的な立法、反対請願・抵抗が繰り返された挙げ句、トム・ペインの『コモンセンス』の衝撃的論説を受けて、アメリカ人は一般人民が統治者となる責任を引き受ける政治制度を構想するようになった。独立宣言はまさにそうした理念の変換、革命を示すものであり、その後、諸州の憲法制定、そして合衆国憲法制定によって、君主制原理から共和制原理への革命を完成したのであった。さらに、1812年の戦争を経験することで、一部有徳な市民だけが統治に積極的に参加する共和制から成人男子一般が統治に参加する民主制に発展させた。

「ペルシア」か「イラン」か？  
「ペルシア人」か「イラン人」か？  
—国民国家的歴史認識の「虚構」—

八 尾 師 誠

現在の国民国家イランの正式名称は、イラン・イスラーム共和国であるが、このイランという言葉が国家の名称として用いられるようになった経緯について、大方の高校世界史教科書では、略略、1935年に当時の国王レザー・シャーが従来の「ペルシア」に変えて「イラン」を採用したとなっている。ところが、歴史史料が語る実態とは、彼ら自身が自らの国を「ペルシア」と正式に称したことは一度もなく—ペルシアとは、要するにギリシア人の呼び方を受け継いだヨーロッパ人による他称—、一方、イスラーム期以降、「イラン」という名称が国号として使用されるのは、18世紀以降のことだということである。今の「イラン」は昔の「ペルシア」、同様に、「イラン人」とは「ペルシア人」のことといった俗説が生まれる背景には、現在の国民国家の枠組みをそのまま歴史に遡及させようとする国民国家的歴史認識が生み出す「虚構」が潜んでいるのである。

中国開封の消えたユダヤ人

佐 藤 公 彦

近年北京のイスラエル大使館に、自分はユダヤ人の後裔だ、イスラエルに移住したいという希望者が多く来るといふ。大使館は彼らをユダヤ人と認めたがらないが、かれらは、自分は開封のユダヤ人の後裔なのだと言張する。ではこの開封のユダヤ人とはどういったものなのだろうか。その存在が知られるようになったのは、1605年、北京に居を構えたイエズス会宣教師マテオ・リッチの教会に艾田という男が尋ねてきたことによる。孤島のユダヤ人コミュニティの「発見」だった。シナゴークも、ヘブライ語のモーゼ五書もある、住み着いて五、六百年になると言った。この「孤児」となったユダヤ人たちは何時イスラエルを離れたのだろうか。どこを通過してやってきたのか。何時中国に着たのか。11世紀中頃、北宋時代、「西洋布」（綿布）を持って都・開封にきて定住したらしいが、金朝支配下、モンゴル支配下、明朝支配下・李自成反乱、リッチの発見、清朝支配、太平天国を経て、中華民国、人民共和国を経て、彼らのコミュニティは消えた。なぜユダヤ人コミュニティは崩壊したのか。なぜ中国文明に同化したのか。ユダヤ人さえ同化させた中国文明とは何なのか。東西文化交流史の中で考えてみたい。

「トルコ」を軸に世界史をみる

新井政美

『李陵』を引き合いに出すまでもなく、遊牧民が、出自や宗教にかかわらず有用なものを取り込み、取り立てていたことはよく知られています。しかし、遊牧民に固有のもののようには思われがちなこうしたことは、ローマでも行なわれていましたし、さらに歴代の中国諸王朝でも同様だったと思われまふ。そうしたことを理解した上であらためて眺めてみると、世界史は少し異なる様相を見せるかもしれません。今回は、まずそうした観点からオスマンやビザンツを考えることで、ヨーロッパに新たな光を当てることを試みてみたいと思います。

ついで、オスマンの後継国家の一つであるトルコ共和国が、公定の「トルコ史」をどのように策定しようとしたかを検討し、国民国家による歴史の専有の問題を考えてみます。その問題は同時に、「世俗主義」や「イスラム派」台頭とも密接にかかわるので、そうした視角から現代トルコのホットな問題にも触れることができると思っています。